発達期待像に及ぼす母親側の要因

詫摩武俊、菅原健介(東京都立大学 心理学研究室)

目的

母親の育児行動について考えてゆく時、それぞれの母親が自分の子供に何を望むかという〝発達期待〟は、1つの重要な研究課題である。なぜならば、母親たちにとってこの〝発達期待〟とは育児における1つの目標であり、この目標を達成するために母親は子供への働きかけや育児方針を定めると考えられるからである。母親が子供に失望するのは、発達期待像とわが子の姿が大きくかけはなれていることを発見する時である。また逆に子供を誇らしく思うのは理想の子供像をわが子の中に見い出した時である。これに伴って母親は子供を叱ったり、ほめたり、子供と話し合ったり、共に喜んだりする。こうした母親の子供への働きかけを方向づける規準が〝発達期待〟なのである。

このような観点に基づき本研究は、母親たちが自分の子供にどんな性格的傾向を期待するのかについて検討した。ここでは、自分の子供に対して「どんな子供であってほしいか」という〝良い子観〟と、「どんな子供であってほしくないか」という〝悪い子観〟の問題をあつかった。

さて、良い子観・悪い子観と一口に言っても母親によってその内容は様々である。しかし個々の母親がそれぞれに全くユニークな意見を持っているというわけではなく、それはいくつかのタイプに分けられるはずである。そこで、本研究の第1の目的は母親たちが心にいだく良い子観と悪い子観をタイプ分けすることである。つまり、発達期待を類型化してみようというわけである。

第2の目的は上記のような良い子観・悪い子観を規定する母親の要因について検討することである。母親の学歴・性格などの諸変数が良い子観・悪い子観の内容とどう結びついているのかを調べ、発達期待の形成について若干の資料を得たかったからである。

以上、本研究の目的をまとめると次のようになろう。母親の持つ発達期待の個人差に注目し、①発達期待の構造を検討しタイプ分けを試ることと、②その構造を規定する母親側の要因について検討することである。

方法

調査対象者

本研究は質問紙調査法にておこなわれた。調査対象者は首都圏にある2つの幼稚園に子供を通わせている780名の母親であり、各幼稚園を通じて質問紙の配布・回収をおこった。有効票は680票であり、有効回収率は88.3%を得た。

分析対象者の年令は、30～35才の30代前半が全体の50%、36～39才の30代後半が23%と30代が計73%を占めている。また83%までが「専業主婦」であり、「パート・常勤」は1割程度にとどまっている。学歴は「高卒」が58%と6割を占め中心であり、「短大卒」「大卒」は合わせて3割強である。

調査の内容

(ア)良い子観・悪い子観を測定する項目:

子供の性格傾向を記述した36項目であり、良い子観に関する18項目と悪い子観に関する18項目より成る。これらの項目は、本調査に先だち247名の幼稚園児を持つ母親への予備調査の結果を基に作成したものである。予備調査は、①どんな時、自分の子供を好ましいと思うか？②どんな時、自分の子供を好ましくないと思うか？という2つの単純な質問より成り、思いつくままを自由に記述してもらった。これらの記述をＫＪ法を用いて分類し、最終的に本調査で用い

た36項目を作成した。良い子観に関する18項目については、自分の子供にとって、「特に望ましいもの」を、悪い子観の18項目については「特に望ましくないもの」をそれぞれの中から6項目ずつ選択してもらった。

(イ)良い子観・悪い子観に影響をあたえると思われる母親側の要因:

職業・学歴などの人口統計学的変数の他に、母親が将来、子供にどの程度の学歴を期待するかを問う質問と、母親の持つ〝発達観〟に関する質問を用意した。発達観についてここでは、何が子供の発達の仕方を決めると思うかと尋ねた。具体的な質問項目は次の通りである。

問:子供の発達に影響を与えるものとして次の3つが考えられますが、あなたはどれが最も重要だと思いますか。

①本人が生きてゆく中で持ついろいろな経験

②親のしつけや働きかけ

③本人が生まれ持った素質

結果

良い子観について選択される比率が高かった項目は、「友だちと一緒に元気よく、楽しく遊ぶ」や「はい、いいえがはっきり言える」「自分が悪かったと思えば素直に反省する」などで7〜9割に達している。また、女児を持つ母親に比べ男児を持つ母親で高かった項目は、「自分の大事なものでも人に貸すことができる」や「水泳やお絵かきなど好きなことに熱中する」などであった。逆に女児を持つ母親の方が高かったのは「自然の美しさに感動する」「いつも明るい笑顔でいる」などであった。

悪い子観については、「気にいらないことがあるとすぐかんしゃくを起こす」や「親の顔色を見てふるまう」「皆と一緒になって友だちをいじめる」等が多く選ばれている。男児・女児を比較すると、「何かあるとすぐめそめそ泣く」は男児を持つ母親の方が、「集団の中で一人だけ勝手なことをする」「親に対していいわけやへ理屈が多い」は女児を持つ母親の方が比率が高めであった。

次に、良い子観の構造を分析するため、林の数量化Ⅲ類による解析をおこなった。数量化Ⅲ類とは相関の高い項目、つまり似た意味内容を持つ項目同志が近くになるよう空間座標を決める方法である。解析の結果2つの主要な次元が導びかれた(Ⅰ・Ⅱ軸の累積説明率は20.3%)。これらの2次元から見ると項目は大きく3つの領域に分かれる(図1参照)。その1つは、「友だち集団の中でリーダーシップをとれる」「初対面の人でも人見知りしないで話せる」及び「少しぐらいケガををしても気にしない」など〝たくましい子供像〟の群である。2番目は、「いつもニコニコ明るい笑顔でいる。」「自分が悪かったと思えば素直に反省する」「自分の思っていることやハイ・イイエをはっきり言える」「決められたお手伝いは言われなくても自分でやる」といった従順な子供、あるいは〝明るく素直な子供像〟を構成している。第3番目の項目群は、「水泳やお絵かきなど好きなことに熱中する」「親に幼稚園であったことを話してくれたり、作ったものを見せてくれる」「家族のことを気づかったり、心配したりする」「きれいな花など、自然の美しさに感動する」などが含まれ、言わば〝心の豊かな子供像〟としてまとまっている。以上のように良い子観としては、〝たくましい子供〟、〝明るく素直な子供〟、〝心の豊かな子供〟という3つのタイプが認められた。

どのような母親がそれぞれのタイプを志向するのかを検討したところ、最も大きな関連が見られたのは、「子供に将来期待する学歴」の要因であった。男児を持つ母親の場合、「短大以下の学歴でもよい」という母親に比べ、「大卒以上」を望む母親は、〝たくましい子供〟よりも〝明るく素直な子供〟であることを願う傾向が強い。一方、女児を持つ母親においては、「短大以下」の母親に比べ、「大卒以上」を期待する母親は、〝明るく素直な子供〟よりも〝心の豊かな子供〟を志向する傾向が見られた。つまり子供に高学歴を望む母親は、子供が男児の時には〝明るく素直な子供〟を、子供が女児の時には〝心の豊

かな子供″を理想としやすいわけである。

次に悪い子観について見てみよう。同様に林の数量化Ⅲ類によって分析した結果、こちらも主要な2次元が得られた(Ⅰ・Ⅱ軸の累積説明率は19.0%)。この2つの次元によって項目の位置関係を見ると、やはり悪い子観にも3つのタイプが認められた(図2)。まず第1のタイプは、「一度イヤと言ったら絶対にゆずらない」「すぐ友だちとケンカをする」「集団の中で一人だけ勝手なことをする」「自分の思い通りにならないとすぐかんしゃくを起こす」などの項目があてはまり、〝自己中心的な子供像″を描き出している。第2のタイプは、「自分が気に入った友だちとでないと遊べない」「何かあるとすぐめそめそ泣く」「自分ができないと思うことには手を出さなかったり、途中でやめてしまう」「集団の中に自分から入って行けない」など〝弱虫な子供像″であると言えよう。第1・第2のタイプが、言わば未熟な子供像であるのに対し、悪い子観の第3のタイプは「親の顔色を見てふるまう」「おとな同志の話の中にすぐわり込んでくる」「親に対して言いわけやへ理屈が多い」「誰かがちょっとでも悪いことをしているのを見るとすぐ先生に告げ口をする」など子供らしさに欠け、ませた子供のイメージが強い。

〝なまいきな子供像″とでも表現できようか。以上のように悪い子観についても〝自己中心的な子供″〝弱虫な子供″〝なまいきな子供″という3つのタイプが見い出された。

また、これらの3タイプと母親の要因との関連を検討してみると、やはり将来子供に望む学歴の高さとの要因が大きく影響していることが示された。男児を持つ母親も、女児を持つ母親も、その子に「短大以下」の学歴でよいとする場合より「大卒以上」を望む場合の方が、〝自己中心的な子供″よりも〝弱虫な子供″を嫌う傾向が認められた。

さらに興味深いことは母親の持つ「発達観」によっても悪い子観が異なるという知見である。「親のしつけ」が子供の発達に最も大きな影響があるという意見を持つ母親は〝自己中心的な子供″を嫌う一方、「本人が生きてゆく中で持ついろいろな経験」が大切であるとする母親は〝弱虫な子供″を嫌う傾向が見られた。

考察と今後の展望

母親の持つ発達期待の問題を今回は、〝良い子観″と〝悪い子観″という子供のパーソナリティ面に対する期待に限って検討してみた。その結果、良い子観・悪い子観はそれぞれ3つのタイプが存在し、いずれのタイプの発達期待を持つかは母親のいくつかの属性と関係していることが示された。特に母親が自分の子供にどの程度の学歴を望むかという変数によって期待像は大きく影響を受けるらしいことが示唆された。今回の調査対象者の子供がまだ幼稚園児であるということと考え合わせると、もうこの時期からすでに将来の〝学歴″の問題が母親たちの心の中にしっかりと根を張っているという事実が今回の結果の中に反映されたものかもしれない。〝学歴″あるいは〝受験″という問題は現代の母親たちの発達期待について考えてゆく際、どうしても注目してゆかねばならない側面であると言えよう。

さらに発達期待に影響を及ぼす要因として母親の持つ〝発達観″が今回の調査からクローズアップされてきた。子供の発達には親のしつけが重要であると考える母親は、言うことをきかない〝自己中心的な子供″を嫌い、一方本人の経験が大切とする母親は自ら様々な世界に飛び込んでゆくことのできない〝弱虫な子供″を嫌っていた。充分論理的にも納得がゆく結果である。この知見はいわゆる「発達心理学」がプロの発達心理学者だけのものではないことを強く主張しているように思える。母親たちも、自分なりの「発達理論」を持っており、その理論を実践的に応用しようとしている様子を読み取ることができるからである。彼女らの発達理論を素人考えとして無視するのではなく、母親たちがどのような発達観を持っているのかという、〝母親たちの発達心理学に関する心理学″、つまりメタ発

達心理学とでも表現できるような視点を「発達期待研究」の中にとり入れてゆく必要があると考えられる。

本調査においては、サンプリング上の問題とともに、対象者を幼稚園児を持つ首都圏の母親だけに限ったという点、今後の課題を残しているように思われる。「発達期待」の問題は、単に幼稚園児を持つ母親だけのものではない。言うまでもなく児童期や思春期の子供の母親たちの問題でもある。またさらに広げると、子供がすでに成人した母親や、子供に養なわれる老母においてもやはりわが子への「発達期待」は存在するのではないだろうか。今後は、こうした長い時間的スパンから「発達期待」の研究が展開されてゆくことを期待したい。子がいくつになっても母と子という間柄は変わらない。しかし、子供の成長とともにその関係の心理的意味は大きく変化する。「発達期待」の中にその変化の様子をたどってゆけるとすれば、〝母子関係〟とは何かという問いに対してライフスパン的観点からの新しい見方を提供できるかもしれない。

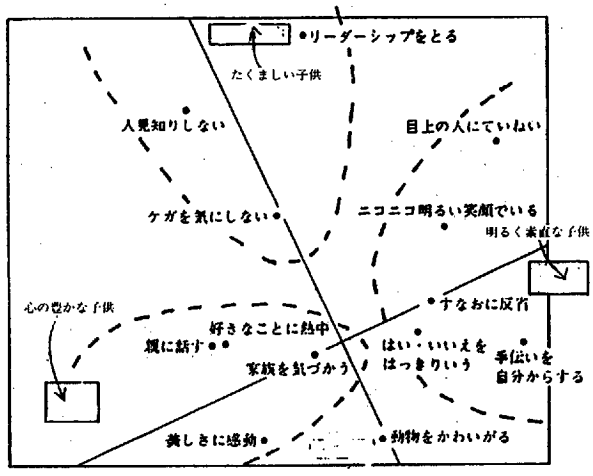

図1　良い子像の構造

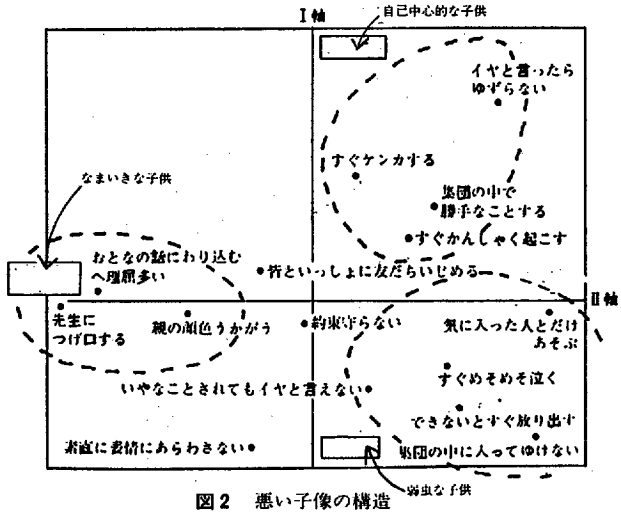

図2　悪い子像の構造

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

目的

母親の育児行動について考えてゆく時、それぞれの母親が自分の子供に何を望むかという“発達期待"は、1つの重要な研究課題である。なぜならば、母親たちにとってこの“発達期待"とは育児における1つの目標であり、この目標を達成するために母親は子供への働きかけや育児方針を定めると考えられるからである。母親が子供に失望するのは、発達期待像とわが子の姿が大きくかけはなれていることを発見する時である。また逆に子供を誇らしく思うのは理想の子供像をわが子の中に見い出した時である。これに伴って母親は子供を叱ったり、ほめたり.子供と話し合ったり,共に喜んだりする。こうした母親の子供への働きかけを方向づける規準が“発達期待"なのである。

このような観点に基づき本研究は、母親たちが自分の子供にどんな性格的傾向を期待するのかについて検討した。ここでは、自分の子供に対して「どんな子供であってほしいか」という“良い子観"と、「どんな子供であってほしくないか」という“悪い子観"の問題をあつかった。

さて、良い子観・悪い子観と一口に言っても母親によってその内容は様々である。しかし個々の母親がそれぞれに全くユニークな意見を持っているというわけではなく、それはいくつかのタイプに分けられるはずである。そこで、本研究の第1の目的は母親たちが心にいだく良い子観と悪い子観をタイプ分けすることである。つまり、発達期待を類型化してみようというわけである。

第2の目的は上記のような良い子観・悪い子観を規定する母親の要因について検討することである。母親の学歴・性格などの諸変数が良い子観・悪い子観の内容とどう結びついているのかを調べ、発達期待の形成について若干の資料を得たかったからである。以上、本研究の目的をまとめると次のようになろう。母親の持つ発達期待の個人差に注目し、①発達期待の構造を検討しタイプ分けを試ることと、②その構造を規定する母親側の要因について検討することである。